

雑感

道守高校定時制

山形誠二

教員生活も三三年が過ぎようとしている。「馬齢を重ねる」とは、まさに私のためにあるような言葉である。とりたてて授業の工夫をするでも無し、クラス経営もうまくいったためしが無い。卒業していった生徒たちには、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

現在は定時制夜間部の担任をしている。もちろん順調ではない。さまざまな生徒がいる。小中学校時代に不登校気味だった生徒も多い。しかし、たとえば、クラスの人数が比較的少ないのも夜間定時制の良いところで、そういう生徒の中でも、何とか学校に來ている者も結構いる。興味・関心を持たせる授業はなかなかできないが、たとえばロングホームの時間は、隣のクラスと合同で行っている。隣のクラスの担任である「日本」先生は、

ユーモアもあり、アイディアマンで、いろいろな企画を私と相談しながら考えてくれるので、大いに助かっている。スポーツやゲーム大会、調理室を使ってお楽しみ会：等々。なかなか話し合いの時間というのは成立しないが、それでもいいのではないかと思っている。たとえばトランプを楽しむ中で、生徒同士の心がなごんでいけばよいと思う。

相談室に席があるので、生徒と雑談することも多い。話を聞いて感じることは、今の生徒たちは、温かい人間関係に飢えているということである。まず、生活の基本である「家族の絆」が壊れかかっている例が非常に多い。慢性的な不況の中、経済的に苦しい家庭が多いのは間違いないが、それでもやはり家庭の温かさは、最も大切なことだと思ふ。また、単なるメル友を本当の友達と想っていたり、必要以上にクラスメートに気を配ったりしている子を見ると、気の毒に思えてくる。(教師に向かつては、実に無遠慮に、こっちの気持ち踏みにじるような言葉を発して平気なのだが、) 本当の親友なんて一人いれば十分と思ふのだが、人間関係にいわれのない不安を抱えている生徒が多い。家族の絆という、本来「あつて当たり前」のものが失われつつある今の日本の社会は、異常である。温かい人間関係を、ごく自然に得ることのできない今の生徒たちは、本当にかわいそうである。

そこで、われわれ教師ができることは何か。実は、何ほどのこともできないと思うが、まずは生徒の話をじっくり聞いてやることではないか。意外とこれができない。つい、こちらの都合で十分に聞いてやれないことがある。「自己チューな生徒が多い」などと日頃嘆いていながら、実は生徒に向かったとき、知らず知らず自分自身が「自己チュー」になっていることが、ままある。辛抱強く生徒の話をきいてやること、まずはそれを目標にしたい。「できるだけ生徒と向き合う時間を多くとること」：コンピュータに向き合うことの苦手を私にできることは、それに尽きると言ってもいい。

さて、来年度から県内の定時制高校は、すべて単位制に切り替わる。メリットもあるかも知れないが、デメリットの方が多いのではないかと心配している。単位制にすることが、本当に生徒のニーズに沿っているのか、はなはだ疑問に思っている。中でも一番の問題点は、「クラス」の存在感が薄れることではないか。本校の場合、一・二年生は来年度からも選択の余地がほとんど無いカリキュラムを予定しているので、あまり変わらないかもしれないが、それでもやはり今までは違ってくるだろう。特に三年生以降は、生徒の授業の選択が多様になり、「クラス」の結束が薄れることが懸念される。たとえば、ホームルーム・遠足・学校祭・修学旅行等々への取り組み方である。学校

祭などの目標に向かって、クラス全員が団結していくということが、今まで以上に難しくなるのではないか。勿論、現在でもなかなかうまくいかない状態ではあるが、それでも最終的には「何とかしなければ…」という思いが生徒たちの間にも出てきて、不十分なながらも何とかカタチになっていく。たとえ失敗しても、何かに向かってクラス全員が取り組むこと自体が大事なのである。単位制になると、その動機付けが薄れてしまうのではないか。また、授業の空き時間の生徒の動向も心配だ。自習室で学習する生徒がどれくらいいるだろう。とかく安易な方向に流れてしまう生徒が多いのではないか。四年間（三修制を活用すれば三年間）で、きちんと卒業していく生徒が減ってしまうのではないだろうか。不安は尽きないが、すでにレールは敷かれている。何とかやっていくしかないだろう。

思えば三〇余年間、失敗し続けの教員生活であった。関係ないが、唯一の趣味の囲碁も、ここぞという勝負所ではことごとく敗退してきた。本業も推して知るべし。だが、幸いなことに、周りには温かい仲間もいる。大分足元がヨロクついては来たが、仲間たちに助けられながら、残された教員生活の中で、少しでも生徒のために力になっていきたいと考えている。